

明中瓦版

令和7年6月号

小中一貫校 彩和学園
富田林市立明治池中学校
校長 堤 周作

「SNSと言葉の力」

昨春 NHKBS で放映されたドラマ「舟を編む」(6/17 地上波でも放映)をご存じでしょうか？ 伝わらない言葉、伝えられない想い、そんな不器用な人たちが中型国語辞典に情熱と心血を注ぐ、作り手たちの奮闘物語。私はこの物語が大好きで、10数年前に“三浦しをん”さんの原作本を読み、映画を見て、そして今回の新作ドラマを視聴しました。「人をつなぐ一言を編む」がテーマで、様々な切り口で展開するお話です。

例えば、①【恋愛】や【愛情】の語釈は辞書によって違い、いかに工夫されているか。②「なんて」の使い方。「なんて綺麗なんだろう」という驚きの意味でも使われる言葉を、主人公は身近な人に、知らぬ間に「バイトなんて休めばいいじゃん」「朝日なんてどこでも同じじゃん」と、軽視する使い方を選択し、相手は「バカにされている」と感じ、距離をおかれてしまう。③分厚い中型辞書の紙は薄く軽く、しかし、裏の文字が重ならないよう「不透明度」も必要。色は目が疲れないようにうっすらと赤を入れたクリーム色に。そして「風合い(ぬめり感)」。めくると紙が指の腹に吸い付き、かといって、次の紙も一緒にめくれたり、静電気が起きて指にまとわりついたりしないようにする。この紙の開発に、5年を費やす。スマホ全盛の時代だからこそ、言葉を大切にすることこのドラマは新鮮で、夢中になって見ていました。

一方、「『子どもの心に悪影響』SNS 規制論議を」という記事がありました(以下 R6/2/17朝日新聞夕刊要約)。アメリカの保健福祉省は調査の結果、子どもの SNS 利用はうつや不安等の悪化に相関があり、「重大なリスク」になると警鐘を鳴らした。問題は女子の方が多く、外形上の姿形の恐怖、摂食障害、自尊心の低下が見られ、SNS を見る事で仲間外れや疎外感を感じたり、誇張されたキラキラとした生活を見て自己肯定感を下げたりする。更に問題なのは、子どもの脳の発育への影響(不注意等)の可能性。人間の脳は触れた環境に適応していくが、生まれた時から電子端末に常時触れている世代は、これまでとは違う脳に育つ可能性がある。スマホやゲーム等の依存性は、経験的によく知られているが、実際に電子端末や SNS は、快楽物質ドーパミンの分泌を促進してハマらせるようにデザインされている。過度な依存は、理性的な思考や感情のコントロールで重要な脳(前頭前野)の発達を阻害する。

本市の小中学校でも、SNS をきっかけにした問題は様々生起しています。それは、家族や教員が知らない所で起こり、広がり、気づいた時には大きくなっています。冒頭のドラマで主人公は、SNS への投稿で身近な人を知らぬ間に傷つけ、自分も傷つけられたのがトラウマとなり、他人とのコミュニケーションに恐怖を感じます。その不安を克服していくセリフに、「言葉ってナイフにもなる。でも言葉が悪いのではない。言葉の使い方や選び方をちゃんと選べば大丈夫」とあります。便利な SNS や「言葉の持つ力」を、人を傷つけるためではなく、誰かを守り、誰かに伝え、誰かとつながりあうために、使いたいものです。